

＜今日の説教のポイント テモテへの手紙 I 6章1～10節＞

1 パウロは奴隷制を認めている？ ここから読み取るべきは何？

「パウロは奴隷制を認めている。ひどい」と思うかもしれませんが。しかし、5人に一人は奴隷、都市部ではもっと多かったローマ時代の問題を今の時代から考えるのではなく、むしろ、なぜここでパウロは急にこの内容を語ったのかを前後の文脈から考えることが大事です。

2 パウロの激しい非難の言葉 — 「信心」の意味から分かる！

パウロはこの後「異なる教えを説く(3)」者たちの問題に戻ります。4-5節の激しい非難の言葉には驚かされます。それほどここに記されたような姿が具体的に起こっていたのでしょう。何が問題なのでしょう？「信心」と訳された言葉が繰り返し出てきます(3,5,6)。この語の原意は「(神への)畏敬・敬虔」です。パウロは、「神様を本当に畏れる信仰であるならこんな姿は取れるはずがない」と思っているのです。先週の個所でも言われていたことです(5:21 前半)。ですから、私たちはここに記されたことを逆向きに考えることを心掛けていけばいいのです。すなわち、神様を本当に畏れるから人を「**ねたまず、争わず、中傷せず、邪推せず**」(4)です。「これができないなら、私を本当に畏れて言えるとは言えないのだよ」と神様から言われていると思ったらいいいのです。すると、心静まり、「**主にある平安**」の中に置かれるのです。

3 「信心を利得の道と考える」(5)とは？ — 「足るを知る」が大事！

パウロは、これらの問題は「**信心を利得の道と考える者の間で起こるもの**」(5)と言った後、「**もっとも、信心は、満ち足りることを知る者には、大きな利得の道です**」(6)と語ります。「満ち足りることを知る」と「信心(神への畏敬)」はどちらが先でしょうか？ もちろん信心です。聖書を通して真の神様と出会わせて下さり、その神様を心から畏れて生きることができるようになった。その時に「満ち足りる」ということを深く考えさせられ、その中を生きるようになったのが信仰者です。パウロは7節以降で特に手強い「**金銭の欲**」(10)を取り上げていますが、それだけではありません。「**満ち足りることを知る**」とき、どんな状況に置かれていても、そのことに不平をこぼすことをやめ、主イエス・キリストに起こったこと全てに目を留め、今の状況の中に「**主にある平安**」を見出して歩んでいけるようになるのです！ 奴隷であっても、です。